前

入学試験問題

国語（文科）

（配点一二〇点）

平成二十四年二月二十五日　九時三〇分～一二時

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
二、この問題冊子は全部で二十ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
三、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
四、**解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。**
五、**解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。**
六、**解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。**
七、**解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。**
八、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

環境問題は、汚染による生態系の劣悪化、生物種の減少、資源のコカツ[a]、廃棄物の累積などの形であらわれている。その原因は、自然の回復力と維持力を超えた人間による自然資源の搾取にある。環境問題の改善には、思想的・イデオロギー的な対立と国益の衝突を超えて、国際的な政治合意を形成して問題に対処していく必要がある。

しかしながら、環境問題をより深いレベルで捉(とら)え、私たちの現在の自然観・世界観を見直す必要性もある。というのも、自然の搾取を推進したその理論的・思想的背景は近代科学の自然観にあると考えられるからだ。もちろん、自然の搾取は人間社会のトータルな活動から生まれたものであり、環境問題の原因のすべてを近代科学に押しつけることはできない。

しかしながら、近代科学が、自然を使用するに当たって強力な推進力を私たちに与えてきたことは間違いない。その推進力とは、ただ単に近代科学がテクノロジーを発展させ、人間の欲求を追求するためのコウリツ[b]的な手段と道具を与えたというだけではない(テクノロジーとは、科学的知識に支えられた技術のことを言う)。それだけではなく、近代科学の自然観そのものの中に、生態系の維持と保護に相反する発想が含まれていたと考えられるのである。

近代科学とは、一七世紀にガリレオやデカルトたちによって開始され、次いでニュートンをもって確立された科学を指している。近代科学が現代科学の基礎となっていることは言うまでもない。近代科学の自然観には、中世までの自然観と比較して、いくつかの重要な特徴がある。

第一の特徴は、機械論的自然観である。中世までは自然の中には、ある種の目的や意志が宿っていると考えられていたが、近代科学は、自然からそれら精神性を剝奪(はくだつ)し、定められた法則どおりに動くだけの死せる機械とみなすようになった。

第二に、原子論的な還元主義である。自然はすべて微少な粒子とそれに外から課される自然法則からできており、それら原子と法則だけが自然の真の姿であると考えられるようになった。

ここから第三の特徴として、ア物心二元論が生じてくる。二元論によれば、身体器官によって捉えられる知覚の世界は、主観の世界である。自然に本来、実在しているのは、色も味も臭いもない原子以下の微粒子だけである。知覚において光が瞬間に到達するように見えたり、地球が不動に思えたりするのは、主観的に見られているからである。自然の感性的な性格は、自然本来の内在的な性質ではなく、自然をそのように感受し認識する主体の側にある。つまり、心あるいは脳が生み出した性質なのだ。

真に実在するのは物理学が描き出す世界であり、そこからの物理的な刺激作用は、脳内の推論、記憶、連合、類推などの働きによって、c チツジョある経験（知覚世界）へと構成される。つまり、知覚世界は心ないし脳の中に生じた一種のイメージや表象にすぎない。物理学的世界は、人間的な意味に欠けた無情の世界である。

それに対して、知覚世界は、「使いやすい机」「嫌いな犬」「美しい樹木」「愛すべき人間」などの意味や価値のある日常物に満ちている。しかしこれは、主観が対象にそのように意味づけたからである。こうして、物理学が記述する自然の客観的な真の姿と、私たちの主観的表象とは、質的にも、存在の身分としても、まったく異質のものとみなされる。

これが二元論的な認識論である。そこでは、感性によって捉えられる自然の意味や価値は主体によって与えられるとされる。いわば、イ自然賛美の抒情詩を作る詩人は、いまや人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口にしなければならなくなったのである。こうした物心二元論は、物理と心理、身体と心、客観と主観、自然と人間、野生と文化、事実と規範といった言葉の対によって表現されながら、私たちの生活に深く広くd シントウしている。日本における理系と文系といった学問の区別もそのひとつである。二元論は、没価値の存在と非存在の価値を作り出してしまう。

二元論によれば、自然は、何の個性もない粒子が反復的に法則に従っているだけの存在となる。こうした宇宙に完全に欠落しているのは、ある特定の場所や物がもっているはずの個性である。時間的にも空間的にも極微にまで切り詰められた自然は、場所と歴史としての特殊性を奪われる。近代的自然科学に含まれる自然観は、自然を分解して利用する道をこれまでないほどに推進し

た。最終的に原子の構造を砕いて核分裂のエネルギーを取り出すようになる。自然を分解して(知的に言えば、分析をして)、材料として他の場所で利用する。近代科学の自然に対する知的・実践的態度は、ウ自然をかみ砕いて栄養として摂取することに比較できる。

近代科学が明らかにしていった自然法則は、自然を改変し操作する強力なテクノロジーとして応用されていった。しかも自然が機械にすぎず、その意味や価値はすべて人間が与えるものにすぎないのならば、自然を徹底的に利用することに躊躇(ちゅうちょ)を覚える必要はない。本当に大切なのは、ただ人間の主観、心だけだからだ。こうした態度の積み重ねが現在の環境問題を生んだ。

だが実は、この自然に対するスタンスは、人間にもあてはめられてきた。むしろその逆に、歴史的に見れば、人間に対する態度が自然に対するスタンスに反映したのかもしれない。近代の人間観は原子論的であり、近代的な自然観と同型である。近代社会は、個人を伝統的共同体の桎梏(しっこく)から脱出させ、それまでの地域性や歴史性から自由な主体として約束した。つまり、人間個人から特殊な諸特徴を取り除き、原子のように単独の存在として遊離させ、規則や法に従ってはたらく存在として捉えるのだ。こうした個人概念は、たしかに近代的な個人の自由をもたらし、人権の概念を準備した。

しかし、近代社会に出現した自由で解放された個人は、同時に、ある意味でアイデンティティを失った根無し草であり、誰(だれ)とも区別のつかない個性を喪失しがちな存在である。そうした誰ともe<u>コウカン</u>可能な、個性のない個人(政治哲学の文脈では「負荷なき個人」と呼ばれる)を基礎として形成された政治理論についても、現在、さまざまな立場から批判が集まっている。物理学の微粒子のように相互に区別できない個人観は、その人のもつ具体的な特徴、歴史的背景、文化的・社会的アイデンティティ、特殊な諸条件を排除することでなりたっている。

だが、そのようなものとして人間を扱うことは、本当に公平で平等なことなのだろうか。いや、それ以前に、近代社会が想定する誰でもない個人は、本当は誰でもないのではなく、どこかで標準的な人間像を規定してはいないだろうか。そこでは、標準的でない人々のニーズは、社会の基本的制度から密(ひそ)かに排除され、不利な立場に追い込まれていないだろうか。実際、マイノリティに属する市民、例えば、女性、少数民族、同性愛者、障害者、少数派の宗教を信仰する人たちのアイデンティティやニーズは、周辺

化されて、軽視されてきた。個々人の個性と歴史性を無視した考え方は、ある人が自分の潜在能力を十全に発揮して生きるために要する個別のニーズに応えられない。

近代科学が自然環境にもたらす問題と、これらの従来の原子論的な個人概念から生じる政治的・社会的問題とは同型であり、並行していることを確認してほしい。

自然の話に戻れば、分解して個性をなくして利用するという近代科学の方式によって破壊されるのは、生態系であることは見やすい話である。自然を分解不可能な粒子と自然法則の観点のみで捉えるならば、自然は利用可能なエネルギー以上のものではないことになる。そうであれば、自然を破壊することなど原理的にありえないことになってしまうはずだ。

しかし、そのようにして分解的に捉えられた自然は、生物の住める自然ではない。自然を原子のような部分に還元しようとする思考法は、さまざまな生物が住んでおり、生物の存在が欠かせない自然の一部ともなっている生態系を無視してきた。

生態系は、そうした自然観によっては捉えられない全体論的存在である。生態系の内部の無機・有機の構成体は、循環的に相互作用しながら、長い時間をかけて個性ある生態系を形成する。エコロジーは博物学を前身としているが、博物学とはまさしく「自然史(ナチュラル・ヒストリー)」である。ひとつの生態系は独特の時間性と個性を形成する。そして、そこに棲息する動植物はそれぞれの仕方で適応し、まわりの環境を改造しながら、個性的な生態を営んでいる。自然に対してつねに分解的・分析的な態度をとれば、生態系の個性、歴史性、場所性は見逃されてしまうだろう。これが、環境問題の根底にある近代の二元論的自然観(かつ二元論的人間観・社会観)の弊害なのである。自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所は、そのような考え方がもたらした悲劇的帰結である。

(河野哲也『意識は実在しない』)

設問

(一) 「物心二元論」(傍線部ア)とあるのはどういうことか、本文の趣旨に従って説明せよ。

(二) 「自然賛美の抒情詩(じょじょうし)を作る詩人は、いまや人間の精神の素晴らしさを讃(たた)える自己賛美を口にしなければならなくなった」(傍線部イ)とあるが、なぜそのような事態になるといえるのか、説明せよ。

(三) 「自然をかみ砕いて栄養として摂取することに比較できる」(傍線部ウ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

(四) 「従来の原子論的な個人概念から生じる政治的・社会的問題」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

(五) 「自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所は、そのような考え方がもたらした悲劇的帰結である」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。)

(六) 傍線部a、b、c、d、eのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a コカツ　b コウリツ　c チツジョ　d シントウ　e コウカン

草稿用

第二問

次の文章は、『俊頼髄脳』の一節で、冒頭の「岩橋の」という和歌についての解説である。これを読んで、後の設問に答えよ。

岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くるわびしき葛城の神

この歌は、葛城の山、吉野山とのはざまの、はるかなる程をめぐれば、ア事のわづらひのあれば、役の行者といへる修行者の、この山の峰よりかの吉野山の峰に橋を渡したらば、事のわづらひなく人は通ひなむとて、その所におはする一言主と申す神に祈り申しけるやうは、「神の神通は、仏に劣ることなし。イ凡夫のえせぬ事をするを、神力とせり。願はくは、この葛城の山のいただきより、かの吉野山のいただきまで、岩をもちて橋を渡し給へ。この願ひをかたじけなくも受け給はば、ウたふるにしたがひて法施をたてまつらむ」と申しければ、空に声ありて、「我この事を受けつ。あひかまへて渡すべし。ただし、エ我がかたち醜くして、見る人おぢ恐りをなす。夜な夜な渡さむ」とのたまへり。「願はくは、すみやかに渡し給へ」とて、心経をよみて祈り申しに、オその夜のうちに少し渡して、昼渡さず。役の行者それを見ておほきに怒りて、「しからば護法、この神を縛り給へ」と申す。護法たちまちに、葛をもちて神を縛りつ。その神はおほきなる巌にて見え給へば、葛のまつはれて、掛け袋などに物を入れたるやうに、カひまはざまもなくまつはれて、今におはすなり。

〔注〕 ○葛城の山――大阪府と奈良県との境にある金剛山。
○吉野山――奈良県中部の山系。
○役の行者――奈良時代の山岳呪術者。葛城山に住んで修行し、吉野の金峰山・大峰などを開いた。
○一言主と申す神――葛城山に住む女神。

○法施――仏や神などに対し経を読み法文を唱えること。
○心経――般若心経。
○護法――仏法守護のために使役される鬼神。
○掛け袋――紐をつけて首に掛ける袋。

設　問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「我がかたち醜くして、見る人おぢ恐りをなす」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「その夜のうちに少し渡して、昼渡さず」(傍線部オ)とあるが、一言主の神はなぜそのようにしたのか、説明せよ。

(四) 「ひまはざまもなくまつはれて、今におはすなり」(傍線部カ)とあるが、どのような状況を示しているのか、主語を補って簡潔に説明せよ。

(五) 冒頭の和歌は、ある女房が詠んだものだが、この和歌は、通ってきた男性に対して、どういうことを告げようとしているか、わかりやすく説明せよ。

第三問

次の文章は、斉の君主景公と、それに仕えた晏嬰との対話である。これを読んで後の設問に答えよ。

公曰、「唯拠与レ我和夫」。晏子対曰、「拠亦同也。焉得レ為レ和」。公曰、「和与レ同異乎」。対曰、「異。和如レ羹焉。水火醯醢塩梅以烹レ魚肉一、燀レ之以レ薪。宰夫和レ之、斉レ之以レ味、済レ其不レ及、以洩レ其過一。君子食レ之、以平レ其心一。君臣亦然。君所レ謂レ可而有レ否焉、臣献レ其否一、以成レ其可一。君所レ謂レ否而有レ可焉、臣献レ其可一、以去レ其否一。是以、政平而不レ干、民無レ争心一。先王之済レ五味一、和レ五声一也、以平レ其心一、成レ其政一也。声亦如レ味。君子聴レ之、以平レ其心一。今拠不レ然。君所レ

a

b

謂レ可、拠亦曰レ可、君所レ謂レ否、拠亦曰レ否。若ニ以レ水済レ水。誰能食レ之。

若ニ琴瑟之専一。誰能聴レ之。同之不レ可也如レ是」。

（『春秋左氏伝』昭公二十年による）

［注］ ○拠――梁丘拠。景公に仕えた。　○羹――あつもの。具の多い吸い物。
○醯醢塩梅――酢・塩辛・塩・梅などの調味料。　○宰夫――料理人。　○献――提起・進言する。
○不干――道理にそむかない。　○先王――上古の優れた君主。
○五味――酸・苦・甘・辛・鹹（しおからい）の五種の味覚。　○五声――宮・商・角・徴・羽の五種の音階。
○琴瑟之専一――琴と瑟の音色に違いがないこと。

設問

(一) 「済二其 不レ及、以 洩二其 過一」(傍線部a)とはどういうことか。簡潔に説明せよ。

(二) 「君 所レ謂レ可 而 有レ否焉、臣 献二其 否一、以 成二其 可一」(傍線部b)は君臣関係を述べたものである。

(ア) これを、わかりやすく現代語訳せよ。「可」「否」も訳すこと。

(イ) この君臣関係からどのような政治が期待されているか。これについて述べた箇所を文中から抜き出せ。訓点・送り仮名は省いてよい。

(三) 「若二以レ水 済レ水。誰 能 食レ之」(傍線部c)をわかりやすく現代語訳せよ。

(四) 「同 之 不レ可」(傍線部d)とあるが、晏子は拠のどのような態度をとらえてこう述べているか。簡潔に説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第四問

次の文章は歌人の河野裕子の随筆「ひとり遊び」で、文中に挿入されている短歌もすべて筆者の自作である。これを読んで、後の設問に答えよ。

熱中、夢中、脇目もふらない懸命さ、ということが好きである。

下の子が三歳で、ハサミを使い始めたばかりの頃のことである。晩秋の夕ぐれのことで部屋はもううす暗かった。四畳半の部屋中に新聞紙の切りくずが散乱し、もう随分長いこと、シャキシャキというハサミを使う音ばかりがしていた。下の子は、切りくずの中に埋まって、指先だけでなく身体ごとハサミを使っていた。道具ではなくて、ハサミが身体の一部のようにも見えた。自分のたてるハサミの音のリズムといっしょに呼吸しながら、ただただ一心に紙を切っているのである。呼んでも振り向く様子ではなかった。熱中。胸を衝(つ)かれた。ア私は黙って障子を閉めることにした。夕飯は遅らせていい。

このようなことは、日常の突出点などでは決してなく、むしろ子供にとってはあたりまえのことなのではないだろうか。大人の側が、それを見過ごしているのである。大人たちは、子供の熱中して遊ぶ姿にふと気づくことがある。そして胸を衝かれたりもするのである。

しかし、と私は思う。大人の私が、子供たちが前後を忘れて夢中になって遊ぶ姿を、まま見落としているにしても、当節の、すこしも遊ばなくなった、といわれる子供たちに較(くら)べれば格段によく遊ぶうちの子供たちにしても、私自身の子供時代に較べれば、やはり今の子供たちは、遊びへの熱意が稀薄(きはく)なように思われてならないのである。

子供時代に遊んだ遊びを思い出す。罐(かん)蹴り、影ふみ、輪まわし、石蹴り、砂ぞり遊び、鬼ごっこ、花いちもんめ、下駄(げた)かくし、数えあげればきりもない。これらはいずれも多くの仲間たちと群れをなして遊んだ遊びである。集団の熱気に統べられて遊んだ快

い興奮を忘れることができない。

より多く思い出すのは、ひとり遊びのあれこれである。私が真に熱中して遊んだのは、ひとり遊びの時だったからである。集団遊びの場合は、何何遊びとか、何何ごっこと、れっきとした名前がついているのに、ひとり遊びは、ひとり遊びとしか言いようがない。よそ目には何をしているふうにも見えないが、その子供には結構楽しい遊びであることが多いからである。

しらかみに大き楕円を描きし子は楕円に入りてひとり遊びす　（『桜森』）

イ　おそらく子供は、ひとり遊びを通じて、それまで自分の周囲のみが仄かに明るいとだけしか感じられなかった得体の知れない、暗い大きな世界との、初めての出逢いを果たすのであろう。世界といってしまっては、あまりに漠然と、大づかみに過ぎるというなら、人間と自然に関わる諸々の事物事象との、なまみの身体まるごとの感受の仕方ということである。その時の、鮮烈な傷のような痛みを伴った印象は、生涯を通じて消えることはない。生涯に何百度サルビアの緋を愛でようとも、幼い日に見た、あの鮮紅には到底及ぶものではないのと同じように。

ひとり遊びとは、自分の内部に没頭するという以上に、対象への没頭なのであろうと思う。川底の小蟹を小半日見ていてなお飽きない、というようなことがよくあった。時間を忘れ、周囲を忘れ、一枚の柿の葉をいじったり、雨あがりのなまあったかい水たまりを裸足でかきまわしたり、際限もなく砂絵を描いたりするのが子供は好きなのである。なぜかわからない。けれどそれらは何と深い、他に較べようもないよろこびだったことだろう。

ウ　菜の花かのいちめんの菜の花にひがな隠れて鬼を待ちゐき
鬼なることのひとり鬼待つことのひとりしんしんと菜の花畑なのはなのはな

（『ひるがほ』）

菜の花畑でかくれんぼをしたことがあった。菜の花畑は、子供の鬼には余りに広すぎた。七歳の子供の探索能力を超えていたのである。私は鬼を待っていた。もう何十分も何時間も待っていたのだった。待つことにすら熱中できた子供時代。今始まったばかりの子供時代の、ゆっくりゆっくり動いてゆく時間に身を浸しているという、識閾にすらのぼらない充足感があったにちがいない。時代もまたそのように大どかに動く時間の中にたしかに呼吸していたのである。今日のように、自然性を分断された風景というものはなかった。大きな風景の中に、人間も生きていられたのである。菜の花畑のむこうにれんげ畑、れんげ畑のむこうに麦畑があり、それらは遠くの山のすそまで広がっているはずだった。

子供時代が終わり、少女期が過ぎ、大人になってからも、エずっと私はひとり遊びの世界の住人であった。何かひとつのことに熱中し、心の力を傾けていないと、自分が不安で落着かなかった。こうした私の性癖は、生き方の基本姿勢をも次第に決定して行ったようである。考え、計算しているより先に、ひたぶるに、一心に、暴力的に対象にぶつかって行く。幸か不幸か、現在の私は、実人生でよりも、歌作りの上で、はるかに強く意識的に、このことを実践している。歌作りの現場は、意志と体力と集中力が勝負である。歌作りとは、力業である。しかし一首の歌のために幾晩徹夜して励んだとしても、よそ目には遊びとしか見えないだろう。然り、と私は答えよう。一見役に立たないもの、無駄なもの、何でもないものの中に価値を見つけ出しそれに熱中する。ひとり遊びの本領である。

（『たったこれだけの家族』）

設問

(一) 「私は黙って障子を閉めることにした」(傍線部ア)のはなぜか、考えられる理由を述べよ。

(二) 「それまで自分の周囲のみが仄(ほの)かに明るいとだけしか感じられなかった得体の知れない、暗い大きな世界との、初めての出逢(であ)いを果たす」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 文中の短歌「鬼なることのひとり鬼待つことのひとりしんしんと菜の花畑なのはなのはな」(傍線部ウ)に表現された情景を、簡潔に説明せよ。

(四) 「ずっと私はひとり遊びの世界の住人であった」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）